

「ゆきもよに、」

—初稿—

2025/8/13
雨森 れに

〈人物表〉

石井 紘子
いしい ひろこ

(72) 関節リウマチを患っている

吉田 みづえ
よしだ みづえ

(50) 紘子の娘

森 洋子
もり ようこ

(享年90) 紘子の母親

※ゆきももは「中語」の降る中での意。

1. 森家・外観(夕)

空は薄暗く、吹雪いている。

古い一軒家の前に、車が一台停まっている。

車には、雪がこんもりと積もっている。

2. 森家・洋子の部屋(夕)

こぢんまりとした和室。石油ストーブが焚かれ、その上でヤカンが湯気をあげている。

部屋は、遺品整理中で散らかっている。

押し入れの前に座っている石井絢子(72)。

衣装ケースに入っている服をゴミ袋へ詰めている。

廊下から吉田みずえ(50)が顔を出す。

みずえ「あ、ブラウスあったら取っというよ」

絢子「もっと早く言ってよ。自分で探さないよ」

みずえ「じゃあいい」

みずえが去る。

絢子は、ゴミ袋の中にブラウスがないか探し始めるが、痛みに顔を歪め、ゴミ袋から手を離す。

絢子の指はすべてスワンネック変形している。

絢子は指を摩りながら、窓の外を見る。

外はごうごうと吹雪いている。

障子を閉めようと掃き出し窓に近づく。

ガラスの下側に結露を見つけ、そして息をのむ。

いくつかの手形が浮き上がっている。それも自分と

同じように変形した指を持つ手形である。

絢子はその場に座り、手形を凝視する。

みずえが部屋に入ってくる。

みずえ「(腕時計を見せながら)時計出てきたんだけど、お父さんに持っていく? って何してんの」

絢子「これ……(手形を指さす)」

みずえ「うわ……あ、ねえ。これおばあちゃんのじゃないの」

絢子「えっ、迎えに来るとかいうの?」

みずえ「違う違う。ほら、ここに布団敷いてたから。窓開けたりしたんじゃないのって」

絃子 「そうなの？前は壁側に敷いてたと思ったんだけど……」
みずえがため息をつく。

みずえ 「そんなに会ってなかったわけ？」

絃子 「……ああしろこうしろってうるさいから」

みずえ 「まあ、ちよっと過干渉だったよね」

絃子 「で、思い通りにならないと癩癩起こすじゃない。あの人」

みずえ 「私にはそうでもなかったけどね。でも、ママ友にもそう

いう人いる。扱い困るよね」

絃子 「言い合いするのも疲れるじゃない？会っていいことな

んてひとつもない」

みずえ 「うん。正直、お母さんと相性よくないなって思ってた」

絃子 「相性とかじゃないんだって。あの人に親らしい愛情って

いうの？なかったんだと思うよ」

絃子が徐々に怒りを露わにし始める。

絃子 「見た？家族写真がアルバム一冊だけ。ありえる？子

供の写真なんて撮っても撮っても足りないでしょ？」

みずえが頷いて共感を示す。

絃子 「そのくせ、私がリウマチになったからって連絡してきて。

遅すぎるでしょ。この歳になってから親ぶられても……」

みずえは困ったような表情で、絃子を見ている。

絃子は、みずえに申し訳なさを覚えて、

絃子 「だから、あなたにばっかお願いしちゃって」

みずえ 「いいって。代わりに遺産多めに貰ったし。おかげで子供

たちの学費は心配ないもん」

みずえは明るく笑う。

しかし、絃子は浮かかない表情で、

絃子 「芳夫さんにも寂しい思いさせちゃったんじゃない」

みずえ 「うちのは大丈夫。子供らと楽しくやってたみたい」

絃子 「いい旦那さんじゃない」

みずえ 「お父さんだって、いい旦那でしょ？昔からお母さんフ

ーストだったし。私はそっちのが寂しかったよ？」

絃子が驚いたように目を見開く。

みずえの瞳に耐えられず、窓に視線を移す。

結露に浮かぶ手形が目に入る。

みずえ「ごめん。いじわるだったかも」

みずえが、絺子に腕時計を渡す。

みずえ「お父さんに、ね。芳夫の分もなんか貰うわ」

絺子「お父さん、明日来るから。もしいらないって言ったら、

芳夫さんに持ってきてきなさいよ」

みずえ「え？ 来るの？ ここ嫌いって言ってたじゃん」

絺子「おばあちゃんがいないから」

みずえ、合点がいったという様子。

みずえ「じゃ、もっとお宝探してくるかな」

みずえが肩をまわしながら出ていく。

絺子は障子を閉める。

部屋に向き直り、ため息をつく。

指を揉みながら、押し入れの前へ戻る。

もくもくと片づけを進める。

服の入ったゴミ袋が増えていく。

空の衣装ケースを引っ張り出す。

ケースの裏からA4サイズの封筒が落ちてくる。

かなり古く、「絺子」と達筆な文字で書かれている。

中には白い紙が入っている。

取り出すと、赤ん坊の手形と大人の手形が並べて押

してある。どちらもリウマチの予兆は感じられない

綺麗な形。下には「森絺子・森洋子」と名前が記さ

れている。

絺子は、洋子の手形の隣に自分の手を置く。綺麗な

手と歪な手を比べるかのように。

3. 森家・台所（夜）

勝手口のある古いタイプの台所。整頓されておらず、

すべてが雑然としている。

ゴミ箱の中にはコンビニ弁当のゴミが入っている。

絺子はダイニングテーブルでお茶を煎れている。

みずえは、食材の置いてある棚を掻きまわしている。

絺子「諦めたら」

みずえ「もうちよっとだけ。おばあちゃんのことだから、おやつ

のひとつやふたつ……」

絃子 「そんなに間食する人だった？」

みずえ 「そう言われると、食べてるの見たことないかも。誰か来たらすぐクッキー出してくるって感じ」

絃子 「もったいない」

絃子がお茶をすする。

勝手口が風でガタガタと鳴っている。

絃子 「(勝手口を見て) 雪かきしなきゃね」

みずえのほうを見るが、まだおかしを探している。
指を温めるように湯呑を包んで、視線を泳がす。
棚の上にクッキー缶が重ねてあるのを見つける。
指をさして、

絃子 「みずえ、あれ」

みずえ 「ええ。なんであんな高いところに……」

絃子 「取るの？」

みずえ 「あれも片付けなきゃでしょ？」

絃子は仕方ないというように腰をあげる。

みずえは棚の前に椅子を運び、その上に立つ。

絃子はその下に控える。

絃子 「気を付けてよ」

みずえ 「わかってる」

みずえが缶に手をかける。

みずえ 「あれ？」

缶を振って音を確認める。紙のような音。

絃子 「なに、どうしたの」

みずえは缶をあけて、驚きの表情。

無言で絃子に缶を渡す。

絃子が缶を受け取る。

中には折り紙の作品が入っている。
不格好な鶴などがあり、そのどれにも日付と「絃子」と書かれている。
絃子のみずえを見る。

みずえ 「上にあるの、全部そうみたい」

テーブルの上に蓋を取った缶が並ぶ。

粘土細工や絵などが入っており、ほとんどが「絃子」のものである。

みずえ「私のも取っといってくれたんだね」

絃子は「みずえ」と書かれた折り紙に触れる。
確かめるように、何度も撫でる。

4. 森家・外観（夜）

風は止んでいて、粉雪が降っている。
室内の照明は消えているが、玄関先だけ点いている。
家の周りは除雪が終わっている。
玄関先には雪かきのシャベルが置いてある。

5. 森家・客間（夜）

狭い和室。鴨居にふたり分の濡れた上着がかかっている。端には旅行鞆が2つある。片方には、ブラウスが何着か置かれている。
絃子とみずえは、布団を並べ寝ている。
絃子が目を開ける。
起き上がり、隣のみずえを見る。
みずえは寝息を立てている。
絃子はみずえの布団をかけなおす。
そっと立ち上がり、客間を出る。

6. 森家・洋子の部屋（夜）

部屋は暗い。
絃子が襖を開け、廊下の灯りが入ってくる。
絃子はその灯りを頼りに窓に近づく。
そっと障子を開ける。
座り込み、ガラスに顔を近づける。
息をふきかける。
ガラスにうつすら手形が現れ、消える。
また、息をふきかける。
現れた手形の横に自分の手をかぎす。
だが、すでに手形は消えている。

今度は長めに息をふきかける。

絺子の手と同じく、歪んだ手形がはっきりと浮かぶ。その横に自分の手形を押す。

絺子が鼻をすする。

照明がつく。

みずえが現れる。あたたかそうな半纏を着ている。

みずえ「どこいったかと思った」

絺子「（顔を隠して）なんでもないったら」

みずえ「葬式でも泣かなかったくせに」

絺子「もう行ってよ」

みずえは着ていた半纏を絺子にかける。

そして、石油ストーブのスイッチを入れる。

絺子「ちょっと」

みずえ「ごゆっくり」

絺子「……悪かったね」

みずえ「いいってば。家族でしょ」

みずえが部屋から出て、襖を閉める。

絺子は半纏に袖を通す。

宙を見つめ、軽く息を吐く。

目元には涙が滲んでいる。

指で涙をぬぐおうとする。

が、襖が開き、ティッシュ箱が飛んでくる。

みずえ「必要でしょ。じゃ、おやすみ（襖を閉める）」

絺子はきよんとしている。

しかし、ティッシュ箱を見ているうちに笑いがこみ上げてくる。

ティッシュを取り、目元を押さえる。

絺子は改めて窓を見る。

窓の外は暗く、明るい部屋の様子が映っている。

× × ×

外から雪かきの音。

雪が止み、空が白み始めている。

ヤカンから湯気があがっている。

ガラスには、結露で手形を浮かび上がっている。

それをただ見つめている絢子。

絢子の胸には昼間見つけた封筒が抱かれている。

絢子はガラスに指を這わせる。

結露に浮かぶ自分と洋子の手形の下に「森絢子・森洋子」と書く。

文字から涙のように水滴が流れていく。

絢子が立ち上がる。

7. 森家・客間（朝）

絢子が襖を開ける。

みずえは布団の中でスマホを触っている。

みずえ「ストーブ、消した？」

絢子「もう。年寄り扱いして」

みずえ「だって。遺品整理で火事なんて、ねえ？」

絢子が半纏を脱ぎ、みずえの布団にかける。

半纏越しにみずえをポンポンと叩く。

絢子「そうかもね」

みずえ「ちよつと。やめてよ。恥ずかしい」

絢子「アンタだって年寄り扱いしたじゃない」

みずえ「お互い、いい歳でしょ」

絢子「そうだけどね」

絢子が顔を歪め、自分の指を摩る。

みずえ、上体を起こして、

みずえ「痛い？ 薬は？」

絢子「できるだけ飲まないでるの。摩ればマシになるし」

みずえ「だから、そういうことやっちゃダメなんだって。決めら

れたように薬のみな」

みずえの両手が絢子の指を包んで摩る。

みずえ「で、薬はどこ？」

絢子「あとで。もうちよつと摩ってて」

絢子はみずえの手を見つめている。

絢子「あんなに小さいおててだったのにねえ」

みずえ「いつの話してんの」

絢子「アンタはリウマチ、気をつけなさいよ」

みずえ「もー、いきなりどうしたの？」

絃子は答えない。

みずえが絃子の顔をのぞき込む。

みずえ「お母さん？」

絃子「あの、ね」

みずえ「うん」

絃子「私もよくなかったよね。ごめん、ね」

絃子がみずえの手を握る。

みずえ「……別にいいよ」

みずえもそれに応える。

8. 森家・外観（朝）

快晴。

朝陽に輝くつららから、雫が垂れる。

おわり